

森岡正博全集第一六巻

引き裂かれた生命

画面閲覧用PDF

第四章〜第七章

* 画面で閲覧するのに最適のレイアウトです。

* 無料でごらんになれます。

* パソコンのハードディスクに保存すれば、電話線を切ってから、ゆっくり画面でお読みいただけます。そのほうが快適に読めます。

* 印刷や、テキストの抜き出しはできません。

* 印刷したり、ページ番号を確認するためには、目次に戻って、印刷用PDFを入手してください。少ない枚数で書籍のように美しく印刷できます。

目次に戻る

森岡正博全集に戻る

第四章

自己利益の本性について、さらに考えてみたい。

自己利益の本性とは、「自己」のために、それ以外のものを利用したり、犠牲にしてもかまわないと考えてしまう本性のことであつた。

自分の快樂のために他人を見捨てたり、自分たちの利益のために他の人々を犠牲にする行動の背後には、この自己利益の本性がある。

前回述べたように、「自己」の範囲は、この私という人間の枠を超えて、さまざまに伸び縮みする。たとえば、それは私の家族を意味したり、地域共同体を意味したり、私の属する国家を意味したりする。それは理性をもって生きている人間だけを意味したり、あるときは痛みを感じる動物までも含んだりする。

では、なぜ、「自己」の範囲は、こんなふうに伸び縮みしたり、ゆらいだりするのだろうか。

その点を考えるために、もう一度、ナシヨナリズムを例にとつ

てみよう。

ナシヨナリズムをささえる感情の背後には、国家にまで拡大された自己利益の本性がある。自分が属している国家を「自己」だとみなし、その「自己」の利益を守るために、他の国家を排斥したり、戦争したりする。

このときに働いている自己利益の本性を、くわしく調べてみたい。

まず、ここに私という人間がいる。私は、この自分のことを「自己」だと認識している。しかし、私が「自己」だと考えるものは、この自分だけではない。私にとって、「自己」の範囲は、この自分の身体を超えてさらに広がり、私が属している国家にまで拡大する。私が属している（日本という）国家は、「自己」である。そういう感覚が、どこかに存在する。そして、オリンピックの競技で日本が負けそうになったとき、「がんばれニッポン」と、ころのなかで叫んでしまったりする。あるいは、どこかの国が日本を攻めてきたときには、日本という「自己」を守るために、みずから武器をとって戦うかもしれない（念のために書いておくが、実際の私はいわゆるナシヨナリストではない。君が代を歌うのはずっと拒否している）。

このとき、日本という国家にまで拡大された「自己」の利益を

守るために、この私という個人が行動を起こしている。そういう行動を私にさせてしまう力こそが、自己利益の本性なのである。

自己利益の本性は、この私という個人に働きかける。自己利益の本性は、この私という個人を窓口にして発動する。私のいうナショナリズムとは、国家の利益のために、国家自身が自己運動することではない。そうではなくて、ナショナリズムとは、国家の利益のために、この私という個人が考えたり行動したりしてしまうことなのだ。そして、そういう個々人の行為が自己組織化され、集積されることによって、国家規模の集団行動となっていく。

もちろん、ナショナリズムというものを、社会システムの自己運動の一形式としてとらえることも可能である。しかし、人間の生命の本性論の文脈では、ナショナリズムをささえる生命の力が、この私という個人を窓口にして吹き出してくるというふうにとらえるのである。

私が日本という国家を「自己」としてとらえることは、私が自分を日本国籍人としてとらえることである。つまり、これは、私の国籍にかんする「アイデンティティ」の問題でもあるのだ。

ところで、アイデンティティを考えるとときには、他人や社会から、自動的に、あるいは強制的に与えられた「外からのアイデンティティ」と、自分自身が主観的に納得して自分に割り当ててい

る「内からのアイデンティティ」を区別しておかなければならない。

たとえば、日本人男性と結婚して日本にやってきた日系の外国人女性の場合、国籍上は日本人となるので、「外からのアイデンティティ」は日本人となるかもしれない。しかし、彼女の「内からのアイデンティティ」は、結婚するまで住んでいた祖国の人間である可能性がある。

同じことは、ジェンダーについても言える。女装している男性、性転換して女装している男性、性転換して男装のままにいる男性、これらそれぞれの人間の「外からのアイデンティティ」と「内からのアイデンティティ」は、複雑かつ微妙にすれちがう。

さらに難しいのは、日本人と結婚して日本に来た人の場合、日本で暮らす時間が長くなれば長くなるほど、自分の「内からのアイデンティティ」が、祖国と日本のあいだで揺れやすくなる。あるいは、在日韓国人・朝鮮人のような複雑な歴史的経緯を背負った人々のケースや、彼らと日本人のあいだに生まれた子どものケースなどでは、「内からのアイデンティティ」は、一筋縄では語れないものになってしまう。

だから、国家や民族や組織などに対するアイデンティティを強固にもっている人間もいれば、逆に、そのようなアイデンティテ

イがつねに揺らいでいたり、さまざまアイデンティティのあいだをさまよっていたり、あるいはアイデンティティをもてない人もいるだろう。

そのことをきちんと念頭に置いたうえで、次のように言うことができる。

人が「内なるアイデンティティ」を何かに求めようとするとき、その人は求める対象に向かって「自己」を拡大するのであり、その瞬間に、その対象のためには他のものを犠牲にしてもいいという自己利益の本性が芽生えるのである。

だから、自己利益の本性を発現させているのは、私が自分を何かに同一化したり、何かの一員として自認したりする、そのアイデンティフィケーションの行為である。自分を国家の一員としてアイデンティファイしてはじめて、私はナショナリズムのとりこになるのだし、自分を自分の身体にアイデンティファイできてはじめて、私はエゴイストになれるのである。

自己利益の本性は、私が自分を何かにアイデンティファイする行為を前提条件として、はじめて動きはじめるのである。

では、そもそも、どうして人は、自分を何かにアイデンティファイしようとするのだろうか。

それは、孤独に生まれて、孤独に死んでいかなければならない

人間が、それでも自分は「ひとり」ではないことを確認したいからである。そして、仲間のつながりのなかで、「自分はひとりではないんだ」という癒しを得たいからである。

たとえば、私は自分を日本人だとアイデンティファイすることによって、日本人という（抽象度の高い）共同体の一員であることを確認できる。私と同じ日本人の仲間はたくさんいるから、私は、自分が「ひとりきり」ではないことを確認できる。そして、日本人という共同体の内部に自分を位置付けることで、この社会のなかで生きていくことの意味を発見することもできる。

だから、孤独に生きて死んでいかなばならないことを恐れる人間は、みずからを何かにアイデンティファイしようとするのである。

だとすれば、「ここから、たいへん興味深いことが明らかになる。

自己利益の本性は、「自己」の利益のためには、他を犠牲にすることをいとわない。それは、動物や植物を自分たちのために利

用し尽くすことを肯定するから、以前に述べた連なりの本性とは対立することが多い。

ところが、その自己利益の本性の基盤には、自分を、国家や、人類全体にアイデンティファイする行為がある。その行為をささえているもの。それは、国家や人類全体へとつながることによって、みずから「ひとりきり」ではないことを確認し、その共同体のなかで生きる意味を見いだしたいという衝動である。すなわち、自己利益の本性もまた、そういう意味での「連なり」の上に成立しているのである。

もう一度、繰り返して言おう。

自己利益の本性の基礎には、アイデンティティがある。アイデンティティは、自分を超越するものへと連なっていきたいという欲求の上に成立する。ということは、自己利益の本性は、自分を生み出してくれたものへと連なりたいという「連なりの本性」の手のひらの上で成立することになる。

前回も述べたように、人間の生命に刻み込まれた「自己利益の本性」は、かぎりなく根深い。それは、他の生物や、他の人間たちを犠牲にしてまでも、自分たちの利益を追求しようとする。しかし、そのような自己中心的な人間の本性が、実は、自己を超越したものとつながっていくことで自分を見出したいという「連な

り」への欲求に基礎づけられているわけである。これは、なんとなく逆説であろう。

この点を、もう少し考えてみる。

自分を何かにアイデンティファイするとき、その現実的な対象としていちばんスケールの小さいものは自分の身体である。このとき、自己利益の本性は、エゴイズムとして立ち現われる。アイデンティティの現実的な対象としていちばんスケールの大きいのは、地球生命圏全体である。このとき、自己利益の本性は、地球中心主義となって立ち現われる。(もちろん、理論的には、自分を脳にアイデンティファイして手足を他者とすることもあり得るし、自分を宇宙全体にアイデンティファイして他者を認めないこともあり得る。しかし、それらについては、ここではとりあえず考慮しない)。

まず、自己を自分の身体にアイデンティファイする「エゴイズム」のケースを考えてみる。エゴイズムでは、自分の身体を超えて、自己を何かにアイデンティファイするということがない。自分の身体は自己なのである。だから、このケースでは、自分を超えて何かに連なっていくというモチーフが出てきにくい。だから、このケースでは、自己利益の本性が「連なり」に基礎を置くという逆説が発生しない。

では、自己を地球生命圏全体にアイデンティファイする「地球中心主義」のケースではどうだろうか。地球中心主義では、地球上に存在するすべての生命体と自己が重ね合わされる。だから、自己とは、この私の身体と連なりあっているところの、地球上の生命あるものの総体である。このケースでは、連なりの本性がめざすところの地球生命圏が、そのまま「自己」と重なっている。すなわち、自己利益の本性がめざすところの自己の「利益」というものが、連なりの本性と対立することはあり得ない。ということとは、このケースでも、連なりの本性を裏切るはずの自己利益の本性が、連なりに基礎を置く という逆説は起きていないことになる。

連なりの本性を裏切るはずの自己利益の本性が、連なりに基礎を置く という逆説が生じるのは、私が、自己というものを、自分の身体よりも大きく、地球生命圏よりも小さいものにアイデンティファイするときなのである。

たとえば、私が、自己というものを、国家にアイデンティファイする場合、私は自分の所属する国家の利益のために、他の国民を犠牲にしたり、環境破壊をすることを後押ししてしまう。連なりの本性から考えれば、他の国家の人々や、様々な生物と私は連なっているはずなのに、私はそれらの存在を犠牲にするような国

家のやり方を肯定してしまう。そのような、他の国民や生物たちとの連なりを切ろうとするナショナリズムが、しかし他方で、自分と同じ国民に対しては強い「連なり」を求めようとするのだ。ここには、たしかに、大きな逆説がある。自己を人類全体にアイデンティファイするヒューマニズムのケースでも、事情は同じである。

このような逆説が生じる背景には、我々が、自己の拡大というもの、国家や人類全体などのような中途半端なスケールで止めることが多いという事実がある。どうして我々は、中間段階の集団に自己をアイデンティファイするのだろうか。

もちろん、私はまだその答えをもっていない。

しかし、ここからふたつの問題があらわれてくる。

ひとつは「差別と平等」の問題であり、ひとつは「暴力」の問題である。

差別と平等については、様々な側面からの考察が必要である。

ここではとてもその作業はできないが、そのかわりに、自己利益の本性が、それらにどのようにかかわっているのかを示唆することはできる。

「自己利益の本性」は次のような傾向をもっているのであった。

自己の利益のために、それ以外のものを利用してよい。

ところで、「自己利益の本性」は、次のような性質をも、同時にもっているのだ。

同じ「自己」に属するメンバーにかんしては、彼らをとばねている性質にかぎって言えば、平等にあつかわなければならぬ。

例をあげてみよう。

たとえば、「ヒューマニズム」の姿をとった、自己利益の本性について考えてみる。そこでは、生きて生活している人間の利益のために、死体や、胎児の一部や、受精卵や、他の生物を、利用したり犠牲にしたりすることが当然のこととされる。この意味で、

「ヒューマニズム」は、それらの存在を明確に差別しているのである。

だが、「ヒューマニズム」は、同時に、「生きて生活している人間」のあいだの差別や搾取の関係を、徹底して否定しようとするのである。いやしくも、生きて生活している人間は、彼らが同じ人間である以上、平等にあつかわれるべきである。そう考えようとすると、どんな人種であろうが、どこの国の人間であろうが、どんな階級であろうが、すべての生きて生活している人間は平等にあつかうべきである。これが「ヒューマニズム」の核心である。

つまり、「ヒューマニズム」は、「生きて生活している人間」ではないものに対する徹底した差別と、「生きて生活している人間」に対する徹底した平等主義によって、特徴付けられるのである。近代の輝かしい成果と言われる「ヒューマニズム」の思想は、受精卵や動物たちの生命を徹底して排除し、差別することによって、はじめて獲得されたのである。

フランス革命の人権思想においては、ヒューマニズムの対象として女性は考慮されておらず、女性への差別は当然のこととされていた。その後の歴史において、女性もまたヒューマニズムの対象として繰り入れられるようになる。ヨーロッパやアメリカ合衆国における黒人の地位も、今世紀にいたって、ヒューマニズムの

対象へと入ってくる。

しかしながら、さきほど述べたように、現在のヒューマニズムは、脳死の人や、受精卵や、他の生物などをその対象に繰り入れようとはしていない。それらは、平等な取り扱いの対象としてではなく、差別的取り扱いの対象でしかないのである。このような差別と平等の構造は、ナシヨナリズムや、民族主義など、他の形であらわれる自己利益の本性にも見られる。

グループの外側に対する差別と、内側に対する平等。この二つがセットになることによつて、自己利益の構造は成立するのだ。差別を肯定し納得するためには、グループの内側の平等を力説しなければならない。内側の平等を肯定し納得するためには、外側に対する差別を力説しなければならない。これは、差別と平等がはらんでいる、共犯の論理学である。

もちろん、グループの内側に対する平等というのは、かならずしもすべての人々にメリットをもたらしたわけではない。たとえば、近代国家が成立するとき、統一的な言語や法がその領域内に強制的に適用され、その結果として、地域の伝統的慣習や文化が破壊されたり、それまで日常的に使っていた言語を略奪されたりすることがひんばんに起きた。これらの出来事は、国家というグループ内での平等を形式的に達成しようとした結果起きた、多

様性の圧殺と、少数者への暴力である。そういう暴力が、国家と
いう社会装置を駆使して行なわれたわけで、いま述べているよう
な、個々人の内側の自己利益の本性という枠組みではもはや把握
できない。ここから先は、冷徹な社会理論が必要である。

いま、自己利益の本性の発露であるナシヨナリズムやヒューマ
ニズムは、そのグループの内部の成員に対して平等であることを
要求すると言った。これは、誤解を招くかもしれないので、少し
だけ補足をしておく。

ナシヨナリズムを体現していることを公言する、ナシヨナリス
トと呼ばれる人たちがいる。彼らは、日本人をほんとうに平等に
扱おうとしているだろうか。

いくら厳格なナシヨナリストであっても、実際に、すべての日
本人を平等に扱おうとするわけではない。日本人の利益を第一に
考えよと主張する人は、往々にして、その日本人のあいだに地位
の上下や、品性の上下や、知性の上下があることを強調する。立
派な日本人と、そうでない日本人がいると考えたり、日本国籍を
もっているけれど「日本人に値しない日本人」がいると言ったり
する。

しかし、「ナシヨナリズム」と「ナシヨナリスト」は、分けて
考えた方がいい。ナシヨナリストが、日本人にも上下があると考

えがちなのは、彼らが共有していることが多い権威主義のせいである。ある価値序列を前提として、それにそって人間の価値の上下が振り分けられるとする権威主義である。

しかし、そのような権威主義と、私がここで述べている意味での「ナシヨナリズム」は、とりあえずは無関係である。ここでの「ナシヨナリズム」は、自分たちの国家の外に対抗して、内部の結束を固めるときに出現してくる考え方や行動のことだ。だから、権威主義的なナシヨナリストでさえ、国家の内部の結束を固めようとするときには、「きみも私も、同じ日本人じゃないか！」と言つて、みんなが平等であることを強調するのだ。このような、外部の敵を想定しながら、内部に向かって「みんな同じ日本人じゃないか」と言いたくなるときに発動しているものこそが、ここで言うナシヨナリズムなのである。そして平等を強調するこのようなナシヨナリズムの言説は、同じグループの内部に実際は上下の格差があるという事実を巧妙に隠蔽し、同じグループの内部にいる外部者を抹殺していく装置となつてはたらく。

さて、それにしても、ある存在を平等に取り扱おうと思えば、それ以外の存在を差別しなければならぬという事実は、かぎりなく重い。宇宙に存在するすべてのものを平等に取り扱うという究極の平等主義に立たないかぎり、平等主義は「差別」を払拭で

きない。差別があるからこそその平等だという論理を、どのように考えていけばいいのだろうか。

ひとつは、差別あってこそその平等という論理を、あからさまに肯定していく考え方である。そして、我々が、どのような存在者を差別すべきで、どのような存在者は平等に扱うべきなのかを、明確に詰めていく。前回に述べた「パーソン論」のような考え方は、これを徹底させようとする。たとえば、一定の自己意識や理性や能力や利害関心をもった存在者だけを平等な取り扱いのグループに繰り込み、それ以外の存在者ははっきりと差別してよいと考える。それ以外の存在者を暖かく扱うことがあるとすれば、それは、そういう取り扱いが我々にメリットがあるとき（ペット）か、あるいはかわいそうだからという温情からそうする場合（痴呆性老人）。

理性ある成人にはインフォームド・コンセント（十分な情報を与えた上で本人の合意を得ること）を平等にとるべきだが、そうでない人間にはインフォームド・コンセントは不必要であり、その人間を保護できる成人の代理同意でよいという生命倫理が、そこから導かれてくる。これは、はっきりと、差別の思想である。

この考え方を洗練させると、生命のヒエラルキーの思想が出てくる。

たとえば、イ又は人間と同じような理性はもたないから、人間と同じように取り扱う必要はない。イ又は、差別されるべきである。しかしながら、イ又は痛みをもつから、その点では人間と同じだ。だから、イ又は痛みを与えるような実験を行なってはならない。

これは、イ又は人間とは違う差別的取り扱いをするべきなのだ。が、「痛みを感じる」という点にかんしては、人間と平等に扱うべきであるとする考え方である。こうやって、イ又は、痛みを感じるが理性はもたないという意味で、人間よりも下位に置かれることになる。

しかし、イ又は、痛みを感じない動物や植物よりは、上位に位置している。イ又はには「不必要な痛みを与えない」ように人間が配慮すべきだからである。植物などに対しては、そのような配慮すら必要ない。

このようにして、理性ある人間を頂点とする、全生命のヒエラルキーができあがるのだ。そしてその思想は、生物のどの側面を人間と平等に取り扱い、どの側面は差別してもかまわないかをきつちりと詰めていくという形の平等主義思想から生まれてくるのである。この意味では、平等主義というのは、全生命の階級社会を基礎づけるイデオロギーであると言ってもよい。

さて、「自分の身体」よりも大きく「地球生命圏」よりも小さい集団に、自己をアイデンティファイしたときの自己利益の本性は、必然的に、その集団以外への差別を内包した内向きの平等主義の形を取る。そして、この種の平等主義は、外への差別なしには成立しないために、他のグループとどうしても敵対関係にはいつてしまう。たとえば、ナショナリズムは、他のナショナリズムと衝突する。ヒューマニズムという平等主義は、家族主義というさらに範囲の狭い自己利益の本性と衝突する。

そのような衝突や敵対関係が勃発したときに繰り広げられるのが、戦いであり、暴力である。自己利益の本性は、一方的な破壊行動としての暴力と、もっとも簡単に結びつきやすい。

4 暴力という装置

人間は、動物を殺して食肉にするときに、暴力をふるう。

相手が人間でも同じだ。人間は、他人を管理したり、支配するときに暴力をふるう。他人の攻撃から自分の身を守るときにも、暴力を使う。「自己防衛」や「快適さの追求」のために人間は暴

力を行使する。

自分たちの国家や民族の利益を守るために、どのくらいの暴力がいままでなされてきたのか。暴力は殺戮を生み、集団暴行を生み、レイプを生み、戦争を生み、そして人々の生活の基盤を破壊する。そんなこと分かり切っているのに、我々は暴力をふるうことをけっしてやめようとしなかった。いまの世界の現実を見よ。いたるところ、暴力と戦争の嵐ではないか。国境線で、夜の市街地で、そして家庭の中で。どうして、我々は、暴力の行使から逃れられないのか。

暴力への衝動は、ほかならぬこの私の内部にはつきりと存在している。

憎しみや復讐のとりこになったとき、我々は、自分のなかの暴力の衝動を押さえることができない。理性は暴力のために眠らされる。それどころか、理性が、暴力を正当化する装置となってそれをサポートすることもある。

憎しみや復讐のために我々が暴力を使うとき、そのふりあげた拳は、相手が血を流して動かなくなるまで止まることはない。相手が地面に崩れ落ち、抵抗するのをやめるまで、暴力の嵐はおさまらない。相手を完全に制圧したとき、はじめて人間のこころには平静がおとずれる。そして、自分をここまでつき動かしてきた

訳の分からない衝動を、客観的に眺める余裕もでてくる。

ボクシングやプロレスの熱狂を見ても分かるように、暴力は、ほかでは得ることのできないカタルシスと満足を我々にもたらしてくれる。ダメージを受けた相手を、さらに殴りつける快感。それが生みだす興奮。そういう試合を見たときに、我々の身体の血はわきかえり、生命は躍動しはじめる。暴力とは、生命のエネルギーが、はげしく発動したものである。

暴力はまた、集団の仲間意識を結束させる装置にもなる。裏切り者をみんなで殴って処刑するとき、そのグループの仲間意識は高まり、熱狂的な一体感が生みだされる（スケープゴート）。グループの団結を維持するための常套手段として、裏切り者への暴力は利用される。この暴力のシステムによって、社会のなかに強固な差別が生みだされることがある。

暴力は、支配の最大の装置である。警察や軍隊などのような、社会によって正当化された暴力集団の裏付けがあつてはじめて、近代国家の秩序は維持される。そういう社会的な暴力集団を背景として、強制力をもった「法」が機能するのだ。暴力なくして、文明は成立しない。

暴力は、つぎの暴力を生んでゆく。暴力の被害にあつたものは、自分のなかにわきあがってくる復讐の衝動に、否応なく直面して

しまう。その復讐は、姿を変えて、関係のない弱い集団へと振り向けられたりする。自分の娘を誘拐犯に殺された父親は、「いますぐあいつを殺してやりたい」とインタビューで答えていた。暴力は、連鎖する。それをくいとめる決定的な仕組みを、我々はまだ発明していない。

暴力は、人間の生命の本性、とくに自己利益の本性に深くいこんでいる。人間が自分を防衛したり、快楽や利益を追求するかぎり、暴力は人間についてまわる。他人に対する暴力を防止するための社会システムを作るには、暴力をふるった人を処罰することのできる、さらに強大な暴力装置が必要になる。

中絶も、殺人も、暴力である。暴力は、国家のあいだの戦争を生みだす。

生命を問うものは、かならず「暴力」と「戦争」の問題を突き詰めなければならない。

暴力の基本にあるのは、相手の意向を無視した一方的な力の行使、あるいは相手が反撃するすべをもたないときの一方的な力の行使である。女性に対する男性からのレイプや、幼児虐待や、武器を持たない一般人に対する虐殺が、典型的な暴力のように感じられるのは、そこにはこの一方的な力の行使がありありとあらわれているからであろう。

だから、ボクシングのような、お互いに腕力でなぐりあうことが認められているゲームでは、ふたりが互角に戦っているかぎり、暴力の側面は背後に隠されている。しかし、ボクシングで、観客がもつとも熱狂するのはどういう場面か。それは、どちらか一方がパンチを受けてふらふらになっているとき、もう片方が一方的にとどめのパンチを繰り出す、そういう場面である。ダウンしそうになつて反撃するすべをもちやもたないボクサーを、ただ一方的に、これでもか、これでもかと殴りつける、そういうシーンに観客はいちばん興奮する。そのシーンを見るために、彼らはやってきているのだ。まさに、この場面こそ、暴力がもつともあらわになる瞬間である。相手が反撃するすべをもちないときの一方的な力の行使であるところの暴力の爆発に、みんなが我を忘れてのめり込むのだ。

反撃するすべをもちない者を、一方的に殴り、いじめ、追いつめ、叩きのめし、殺してしまいたいというこの暴力衝動を、我々の多くはみずからの内部に秘めている。それは、現代社会において、様々な偽装をとりながら、小刻みに耐えず発散させられているのである。

この暴力衝動は、我々の奥深くに刻み込まれた自己利益の本性から発している。自分たちの利益のために他の生物や人間たちを

利用するときの、もつとも手っ取り早い方法は、相手が反撃できないときに、一方的に攻撃して、欲しいものを手に入れるやり方である。それだけではない。自分たちの生命や財産が危なくなつたときの自己防衛の場面で、最終的に頼りになるのは、やっぱり暴力である。暴力を我を忘れて行使できたり、あるいは知性を使つて組織的に行使できたおかげで、人間は自己利益の本性を満足させ、いままで無事に生き延びてきたと言えるかもしれない。

我々は、内なる暴力性から逃れきることはできないであろう。我々は、みずからの暴力性と付き合いながら、社会のなかで生きていかなければならない。地上の完全平和をうたう宗教でさえ、暴力と戦争から逃れ得たものはほとんど存在しなかった。レイプや、幼児虐待や、虐殺に反対しながらも、しかしみずからの暴力性を抱え込みながら生きることしかもはや残されていない。

暴力の問題は、先に述べたアイデンティティともかかわっている。

娘を殺された父親は、犯人を殺してやりたいと言う。そのとき、父親は、娘を「自己」の一部としてアイデンティファイしている。そして、殺人犯を「自己」の外部の人間として考えている。「自己」のために、「自己」以外のものを処罰するという場面で、暴力性はもつともスムーズに発露する。

だが、もし、この娘を殺した犯人が、実は家族の一員だったらどうだろうか。たとえば、同居していた兄が妹を殺したのであつたとき、父親は自分の息子を殺してやりたいと思うだろうか。このようなケースでは、単線的な暴力衝動や、殺人衝動は生まれにくいだろう。そのかわりに、父親の内面では、押さえきれない暴力性が、複雑に屈折して内向するにちがいない。なぜなら、父親の内部では、家族に対するアイデンティティが混乱状態になり、「自己」のために「自己」以外のものを処罰するという意味での暴力衝動が宙吊りになるからである。

暴力とアイデンティティの問題は、さらにくわしく詰めなければならぬ。本連載が終わった後で、改めて考え直してみたい。

第五章

「連なりの本性」と「自己利益の本性」について述べてきた。今回は、このふたつに匹敵する第三の本性である、「ささえの本性」について考えてみたい。

「ささえの本性」とは、自分の利益には直接関係なくとも、困っている他の人間を助けてあげたくなる本性のことである。人間は、自分の利益をまず第一に考えてしまう本性をもっているのだが、しかしそれと同時に、困っている他者を目の当たりにしたとき、自分の利益とは無関係に、あるいは自分の利益に反するかもしれないのに、その他者を助けてしまうことがある。この点に注目したいのである。

連載の第一回るときに、困っている人を助けたいという援助思想に、二種類あることを指摘した。ひとつは、利己主義の援助思想である。それは、いわば「情けは人のためならず」という考え方に基づいている。つまり、困っている他人をいま助けておけば、今度自分が困ったときに誰かに助けてもらうことができるのでは

ないかと期待する。そのような援助思想である。

もうひとつは、利他主義の援助思想だ。それは、いわば「惻隱の情」、つまり、困ったり苦しんでいる人がいたときに、いてもたってもいられなくなって思わず助けてしまう、そのような人間の感情を基盤とした援助思想である。

このように、困っている他人を助けるときに、我々は二種類の動機で行動する。将来自分に見返りがあるから助ける場合が「利己主義の援助思想」である。その背後には「自己利益の本性」がある。自分に見返りがないかもしれないのに助ける場合が「利他主義の援助思想」である。その背後には、これから述べる「ささえの本性」がある。

地球上の動物たちは、何かの形の群れを作って生活していることが多い。住居や巣を作ってそのなかで共同生活する動物もいる。お互いの顔が見えるくらいの距離の群れを作るものもいるし、一見ばらばらに行動しているようであっても実は緊密な連絡を取りながら情報交換している動物もいる。ふだんは個人行動をとっているのだが、集団移動のときや、交尾の季節になると群れを作るものもいる。

クロポトキンが『相互扶助論』のなかで説得力をもって示したように、同じ種に属する動物たちは、群れを作ったときに、驚く

ほどの助け合いを見せる。仲間を危機から助け出すカニや、つがいを組んだ相手のことを徹底して気にかける鳥の習性など、助け合いの精神はあらゆる動物に見られる。なぜなら、そのような助け合いがなければ、動物たちはきびしい自然の猛威に打ち勝って生き延びてゆくことができなかったからであり、他の種との競争に勝ち残ることができなかったからである。

同じ種に属する動物たちは、お互いに助け合うことによって生き延びようとしている。クロポトキンは、人間もまたそうなのだと考える。人間もまた、お互いに助け合うことによって、今日まで生き延びて来れたのだと。そして、その助け合いのうえに、高度な文明社会を築き上げてきたのだと。

私も、この点はクロポトキンに同意したい。

人間も動物である以上、動物たちが長い進化の途上で獲得したものを、身体の奥底に刻印している。人間は、お互いのために助け合うという行動様式を動物から（哺乳類 類人猿を経て）受け継いでいる。その基盤の上に、今日に至るような社会と文明を作り上げたのである。

人間は太古の昔から、家族や親族などを基本単位とした共同生活を行ってきた。共同で採集や狩猟をしたり、育児をしたり、外敵から身を守ったりした。農耕や牧畜がはじまると、それら食

料の維持のための作業を共同で行なった。定住するようになる
住居を共同で構え、森を切り開いたり、河川の修復を行なったり
して、住む地域を整備していった。

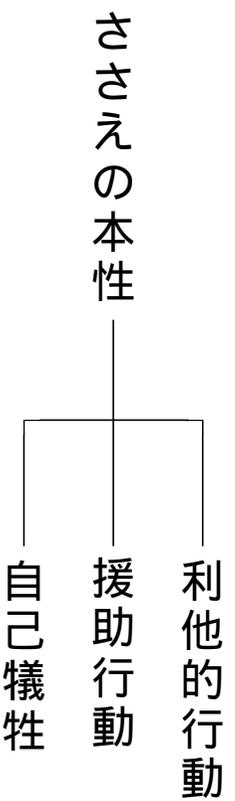
そのような共同作業を絶え間なく行なってきたからこそ、人間
は、自然の脅威や外敵の襲来をなんとか食い止め、食料の供給を
維持して、子孫を残し続けることに成功し、今日まで生き延びて
きた。人間が動物から受け継いで維持してきたこのような事実を、
「ささえの事実」と呼ぶことにしたい。

人間がお互いにささえあって共同生活をすることによって、今
日まで生き延びてきたというこの事實は、人間の奥底に、「ささ
えの本性」を植え付けた。

「ささえの本性」とは、困っている者、助けをもとめている者、
苦しみを訴えている者、不安におびえる者などを見たときに、彼
らを助けてあげたい、ささえあげたい、世話してあげたい、守
ってあげたい、願いをかなえてあげたいと思い、行動してしまう
本性のことである。

この本性は、基本的には同じ種である人間に対してはたらくの
であるが、動物や植物に対してはたらくこともある。また、この
本性は人間がその進化の過程で動物から受け継いだものである。
だから、人間の歴史よりも古いところに根源がある。

「ささえの本性」は、(1) 利他的行動、(2) 援助行動、(3) 自己犠牲、などの形をとってあらわれる。それぞれについて、簡単に説明したい。



人間は、かならずしも自分のためにならないような行動をすることがある。その一例として、入ってくる他人のためにドアを開けてあげるとか、次に使う人のために洗面所をきれいにして立ち去るとかの行動がある。

これらの利他的行動のある部分は、「自己利益の本性」のあらわれとして解釈することができる。すなわち、他人のためにドア

を開けてあげると、今度は自分が開けてほしいときにドアを開けてもらえることが期待できる。あるいは、他人のためにドアを開けてあげることが習慣付けられた社会では、自分が老いたときやけがをしたときに、自分が損をすることはない。そのような自己利益を念頭においた行動である可能性はある。

しかしながら、利他的行動のすべてを、自己利益に還元して考えることには無理がある。

ドアを開けてあげたり、洗面所をきれいにして立ち去るとき、我々は、それによって他人が喜ぶだろうなと思ったり、他人が気分良くなるだろうなと思ったりして、その行動をするのである。そうすることで、他人の役にたてたかなと思つてうれしくなったりする。

日常的な利他的行動の背後には、他人のためになにかをしてあげたいというささえの本性が潜んでいる。他人が喜んだり、気分よくなったり、楽になったりすることを、みずから進んでしてあげたいという本性がある。

もちろん、そういう「美しい」ことをしている自分を確認して自己満足したり、自分を偉いと思つたりするケースもあるかもしれない。そして、そのような自己満足のために、利他的行動を行なう人もたしかにいるであろう。しかしながら、利他的行動のす

べてを、自己満足や自己確認を目的としたものだと考えるのは行きすぎである。

このような利他的行動は日常生活の隅々に見られる。

利他的行動がはらんでいる問題点のひとつは、その行動がほんとうに他者のためになるのかどうか、行動している本人には分からないところにある。いらぬおせっかいであったり、逆に不快を味わわせることもしばしばある。この思い違いが大きくなったときの危険性については、次回に述べたい。

我々は、人間以外のものに対して利他的行動をすることもある。たとえば、植木鉢が日陰に置かれていたときに、陽があたらなとかわいそうだと思って、日向に出してあげることがある。これは、陽に当たったほうがその植物はうれしいだろうなと思って、その植物のためにしてあげるのである。この場合、その植物を日向に出してあげたからその植物から恩返しをされると思っているわけでもないし、植物のことを気にかけている自分を自己確認するための儀式でもないだろう。そこにあるのは、その植物がよるこぶだろうなという思いである。その思いから出た行動である。

自己確認にかんして言えば、「私は、他のものが苦しくないだろうか、どうすればよるこぶだろうか、ということをつねに気にかけている人間である」という自己確認をするために人は利他的

行動を行なう、という考え方があってもいい。植物を日向に出してあげるようなケースにも、そのような自己確認の痕跡が見られるかもしれない。しかし、その人が、そのような自己確認に突き動かされている理由は、その人が「他のものをつねに気にかける」ということを異常に重視しているからである。ただし、その重視の仕方が屈折している。自己確認がいつも気になる人のところの底にも、そのような屈折を生み出す原因であるところの「ささえの本性」が存在していることだけは間違いない。

3 援助行動と自己利益の衝突

「ささえの本性」が、もともとクリアーにあらわれるのは、苦しんでいる人や、赤ちゃんなどに、思わず手をのばして助けあげるときである。

道端にうずくまって苦しんでいる人がいたときに、私のこころのなかには、「ああ、めんどろだ、しらんぷりをして通り過ぎてゆきたい」というエゴイズムの気持ちと、「どうしたのだろう、助けて、力になってあげたい」というささえの気持ちと、同時に

発生する。このときの、ささえの気持ちの背後には、私に刻み込まれた「ささえの本性」がある。そして、このささえの本性が、エゴイズムに打ち勝ったとき、私はその人を助け起こすという援助行動にでるのである。

赤ちゃんが、無防備なすがたで、手足をばたばたさせながら激しく泣き叫んでいるとき、私のこころのなかには、「手がかかってめんどろだ、どこか見えないところにいなくなってしまえばいい」というエゴイズムの気持ちと、「この無防備な弱い生きものを、抱きしめて守ってあげたい」というささえの気持ちが、同時に発生する。子育てとは、自分のなかにあるエゴイズムと、子どもがかわいい、守ってあげたいというささえの気持ちとのあいだの、絶えざる闘争の世界である。

看護婦さんは、「患者さんがよくなって退院してゆくときの、ありがとうということばと笑顔に触れたときに、この仕事をしていてほんとうによかったと思う」と語る。そこには、自分たちの援助行動が効を奏し、「ささえの本性」が満たされたよろこびがある。ささえあげた結果、その人がほんとうに喜んでくれれば、援助した人もこのうえない満足を得ることができる。そのような満足がほしいから人々は援助行動をするという言い方ができる場合もあるだろうし、同時に、そのような満足があるからこそ援助

行動を職業としてなんとか続けられるのだという事実もある。

「ささえの本性」は、弱い立場にある人が、こちらに向けて訴えかけをしたときに、もつとも強く喚起される。

赤ちゃんのような、まったく無防備で、そのまま放っておけば死んでしまうような人間が、こちらに向かってほほえみかけたり、不快を訴えて泣き叫んだりしたときに、人間のなかの「ささえの本性」は強く刺激される。

苦痛や悩みをかかえている人が、その苦しみを訴えてきたり、そばにいてほしいと話しかけてきたとき、私は仕事の手をやすめて、その人のもとに行って声をかけてあげざるをえない。いやだなあと思いつつも、自分のなかにある「ささえの本性」が刺激されるのを無視するのは難しい。声をかけてあげないと、あとで何を言われるかわからないという危惧もこころをかすめるが、私の気持ちはそれだけではない。その人を助けてあげたいという願いは、はつきりと存在している。

援助行動は、人間に対してなされるだけではなく、畏にかかって苦しんでいる犬を逃がしてやる時のように、動物に対してなされることもある。植物に対してなされることもあり得る。

ところで、援助行動をする時の実際のこころの動きは、もつと複雑である。

地下鉄の自動券売機のまえで、どうしてもいいか分からずに困っている外国人や、老人を見たときに、私のこころのなかには、使い方を教えてあげて、その人の不安をしずめてあげたいという気持ちがある。自動的にわいてくる。

しかし、「私がやらなくても、ほかのだれかがやってくれるだろう」とか、「急いでいるから、時間がもつたない」とか、「こんなことにいちいち対応していたら、都会では生活していけない」とか、「いまは人とはかわりたくない」とか、「もし手助けをして、逆にめんどろなことが起きたらいやだ」とかいった気持ちがある。が、わつと押し寄せてきて、私はそのままそこを通り過ぎていくかもしれない。都会の街角では、人は他人に対して冷たい。都会では、人間だれしももっている「ささえの本性」の発現が、きわめて抑圧されている。

だが、そういう都会であっても、困っている人がとてつもなく強い訴えかけの目をして私を見つめたとすれば、私はいくら急いでいても、いくらめんどろだなどと思っても、その人に対応せざるを得なくなる。「どうしたのですか」と声をかけたり、荷物をもつてあげたりせざるを得なくなる。

ほんとうはいやなのに、人を助けてしまう。

このとき、私のこころのなかでは、ほんとうは立ち去りたかつ

た、自己利益に徹したかったという思いが、消え去ることなく渦巻いている。「ささえの本性」に負けて抑圧された「自己利益の本性」が、消えることなく残っている。その思いは、援助行動を行なう人間のこころのはたらきを、複雑に屈折したものと変容させ、何とも言えないフラストレーションが残されてしまうのである。

では、そこまで訴えられながら、それを無視して立ち去ったとすればどうか。その場合、私のこころのなかには、「悪いことをした」とか、「どうして助けてあげなかったのだ」とか、「いまごろあの人はどうしているだろうか」などの思いが渦巻いて、やはり複雑な屈折をかかえてしまうに違いない。そういう思いをかかえるのはいやだから、すぐに意識上から消して、なかったことにして生活を続けていく。けれども、そのこころの傷は完全に消去できたわけではなく、折りに触れてふつと記憶の底からよみがえってきて、いつまでも私をいらだたせるのである。

だから、援助行動というのは難しい。よろこんで他人のことを助けてあげて、その他人もうれしくなるというケースばかりだったら、どんなにかいいだろう。しかし、多くの場合、援助行動は、自己利益の本性と衝突する。それを根本的に解決する道は見つからない。

人間の利他的行動は、ときとして自己犠牲にまで高まることがある。

たとえば、災害にあったときに、自分の生命を犠牲にして子どもの生命を守る母親がいる。あるいは、多くの仲間を救うために、みずからすすんでいのちを捨てる人間がいる。

どうして人間に、そんなことができるのだろうか。

自己防衛と自己生存が深くこびりついた人間に、どうして生命を賭けた自己犠牲ができるのか。

自己犠牲の物語は、最大の「美談」「感動的なお話」として、語りつがれてゆく。宮沢賢治の童話があれほどまでに感動を呼ぶのは、そこに人間の自己犠牲の姿が、かぎりなく美しく描かれているためだ。

自己犠牲には、様々な要因が考えられる。

たとえば、母親が子どものためにいのちを捨てる時、母親は自分の生存を放棄するかわりに、将来ゆたかな子どもの生存の方

を選択している。これは、血縁でつながってゆく生命の連鎖の方を、母親個人の自己利益よりも優先するという、生物学的な判断にもとづいているとも解釈できる。このように、衝突する二つのレベルの「自己利益の本性」のあいだの闘争として、自己犠牲の現象を説明することもできるだろう。

あるいは、人間が、仲間や共同体の利益のために自分のいのちを捨てる時、その人間のこころのなかでは、「これで自分もみんなの役に立つことができた」という一種の自己実現が達成されているかもしれない。

自己犠牲には、「連なりの本性」が反映されている場合もある。たとえば、民族や宗教や国家のために自己犠牲をする時、その人間は、共同体へと一体化し、そのなかへと自分を消し去ってしまいたいという熱狂のうちに、いのちを捨てる。自分という個体よりも、もっと大事なものがあるのだという自己犠牲の直覚の背後には、共同体にあらわれた「生命の母体」へと一体化したいという、連なりの本性がある。理想やイデオロギーや宗教のために自己犠牲する場合も、そういう超越的なものなかへと自分を消し去りたいという意味での連なりの本性がある。

しかしながら、自己犠牲の行動を生み出すいちばん大きな要因は、やはり「ささえの本性」である。母親が子どもの生命を守る

ためにみずからの生命を捨てる時、母親の行動をささえているいちばん大きな要因は、窮地に陥っているこの子を助けるためならば、自分の生命なんかどうなってもいいという思いであろう。目の前の、この子の重さにくらべれば、いまの自分の生命など比較にならないくらい軽いという気持ちに、その瞬間はなってしまう。あるいは、目の前で溺れようとしている子どものことしか世界には存在しなくなつて、自分自身のことなどは完全に意識からはずれているのかもしれない。母親をそういう状態にさせるいちばん大きな要因が、ささえの本性である。

このような自己犠牲は、血縁の人間に対してだけではなく、通りすがりの見知らぬ他人や、たまたま一緒になつた他人に対してもなされることがある。

普通の人間にとっては、いのちを賭けた自己犠牲くらい難しいものはない。人間個体に深く刻み込まれた自己防衛と自己生存を放棄することは、至難のわざである。

自己犠牲の話聞いて、我々は涙をながして感動する。

我々のなかに自己犠牲への衝動があるにもかかわらず、我々は自己防衛と自己生存の本性に負けてしまつて、自己犠牲を行なうことはできない。自己犠牲への衝動は、個体レベルの自己利益の本性によつて抑圧されている。だから、我々は、自己犠牲の実例

やお話を聞くときに、我々の内部に抑圧されていた自己犠牲の衝動が架空発散されるのを感じ、カタルシスを得るのである。

ところで、自己犠牲を語るときにいちばん注意しておかなければならないのが、強制された自己犠牲の存在である。

自己犠牲のなかには、ほんとうはしたくないのだけれども、様々な事情からいやいやながら自己犠牲する場合が含まれている。たとえば、自分のやりたいことや仕事を犠牲にして子育てに専念している母親の場合、ほんとうは昼の育児は保育所にまかせて、自分はほかのことをしたいのだけれども、親や親戚や近所の目が気になってそれができず、自分の時間をしかたなく犠牲にしていることがある。このような場合、何も知らない他人から見れば、この母親は子育てに熱心な、献身的な親だというふうになる。しかし、本人からしてみれば、ほんとうはしたくない自己犠牲を、仕方なく引き受けているという実感をもっていたりする。さらに言えば、父親が育児に協力的ではないがゆえに、母親が自己犠牲を強いられていることも多い。しかし、父親が育児に参加することが不可能なくらい、父親の会社の仕事状況がきびしいこともある。こんなケースでは、母親に強いられた自己犠牲の原因は、社会構造的なものであることになる。

さらに複雑なのは、自分が自己犠牲を強いられているという事

実が自覚できないようなケースだ。たとえば、父親に充分時間があつたのに、彼が育児に参加しないおかげで、母親の自由時間が奪われているのだが、母親自身がそのことを変だと思わないことがある。なぜなら、その場合、母親自身が、「育児は女のすべきことだ」という性別役割分業の考え方を内面化しているからである。だから、自分が、本来は払わなくてもいいような自己犠牲を支払っているかもしれないということに、気付かない。このような「母親らしくあれ」あるいは「障害者らしくあれ」というような、社会の側からの洗脳に侵されているとき、人は、自分の自己犠牲が不当なものであるかもしれないということを実感できない。

このようなことは、男性にも起きる。たとえば、仕事人間の男性が、会社に滅私奉公して、そのあげくに過労死してしまつたとき。あるいは、お家のために腹切りする武士や、戦争中の特攻隊なども、そういう形の自己犠牲を、共同体から有無を言わせぬやりかたで強いられたのである。

人間の奥底には、このような「ささえの本性」が根深く刻印されている。

もちろん、実際の助け合いの行動は、「ささえの本性」だけからなされているのではない。そこには、自己利益の本性もはつきりとあるし、連なりの本性すら見出されることがある。しかし、かといって、「ささえの本性」の存在を否定するのは不毛である。

社会生物学、およびその俗流理論によれば、人間の助け合いの行動は、すべて自分や血縁の子孫をなるべく多く残そうとする遺伝子の戦略の結果、生じたものであるとされる。その考え方を押しすすめれば、人間個体が示すささえあいの行動というものは、すべて、血縁集団かあるいは種の自己利益を目的としたものであることになる。よって、「ささえの本性」と見えるものは、実は、血縁集団かあるいは種を目的とした「自己利益の本性」へと合理的に還元されることになる。

私は、このような考え方からは距離を取りたい。

もちろん、生物学が明らかにしてきたように、生物個体のあいだの助け合いの行動は、その生物の血縁集団や、共同生活している共同体や、子孫を再生産するための種をなるべく長く生き延びさせるために、進化の途上で獲得されたものである可能性が高い。

人間という生物の場合でも、それは同じであろう。

しかしながら、そのような「ささえの事実」の積み重ねのなかから人間が獲得し、そして、人間の奥底に刻印されることになった「ささえの本性」というものは、社会生物学が考えているような「自分たちの子孫と種の繁栄をめざした合理的行動」を導く遺伝子の戦略とは、ズレは始めている。たとえば、家庭のなかで、あるいは医療のなかで、この子のため、その人のためを思って「ささえ」てあげようとするその行為の積み重ねが、いまどのくらいの抑圧となってささえられる人々にのしかかり、その結果複雑な支配を生み出し、暴力を発生させ、逆に人々を苦しめ、社会的病理を作り出しているか。私が「ささえの本性」として取り出したものは、我々の共同体を長く維持させる力となる一方で、逆に、それを抑圧し萎縮させる力となってもはたらくのである。社会生物学が、利己的遺伝子の戦略と呼んでいるものと、私が「ささえの本性」と呼んでいるものは、異なっていると思わざるを得ない。

さらに、俗流社会生物学では、具体的な人間行動を遺伝子の戦略に還元して説明しようとするが、それはたとえば人間の感情の生起を脳内の原子のふるまいに還元して説明しようとする発想と同じである。そのような還元が原理的に不可能であるとは言えないが、しかし、ではそのような還元の実例を具体的に記述して

くれと要求しても、いまはまだできない、将来はできると言われるだけである。「遺伝子」というのは、この場合、機能的な説明概念なのであって、それが実際にヒトゲノムのどの箇所にどういふふう配列されていて、それが具体的にどのようなタンパクを作り、どのようにその後の物質生成をコントロールしているのかを、社会生物学は説明しない。さらに、その「遺伝子」なるものと、人間の具体的な行動とのあいだの、あやふやでない因果関係を説明しない。この意味でも、「遺伝子」にまで還元する理論は、きわめて不毛である。

さて、「ささえの本性」は、共同体を維持するだけではなく、逆にそれを抑圧し萎縮させる力にもなると述べた。それは、「ささえの本性」が、独特の権力を発生させ、パターンリズムを形成し、個人の自立と対立することがあるからである。そのあたりのことを、次回に考えてみたい。

第六章

ささえの本性とは、困っている者、助けをもとめている者、苦しみを訴えている者、不安におびえる者などを見たときに、彼らを助けてあげたい、ささえてあげたい、世話してあげたい、守つてあげたい、願いをかなえてあげたいと思い、行動してしまう本性のことである。

ささえの本性は、「利他的行動」「援助行動」「自己犠牲」などの姿をとつてあらわれてくる。その具体的なケースを、前回くわしく検討した。

今回は、ささえの本性をめぐる難問のいくつかを、さらに掘り下げて考えてみたい。

まず、ささえの本性がもつとも強く発動してしまうのは、困っている者や、助けを求めている者が、私の目の前にいて、私に向かつて助けを訴えているときである。道端に倒れて、私に向かつて助けを求めてくる老人を目の前にしたときや、私の目の前で子どもが溺れてもがいているとき、私の内部でささえの本性がはげ

しく活性化される。(もちろん、それに巻き込まれるのがいやで、私がそこから逃げてしまうこともある)。

ところが、目の前にいない者に対しては、ささえの本性はそれほど強く沸き起こってこない。どこか知らない国で苦しんでいるはずの人々に対して、私たちはいちいち敏感に反応したりしない。自分の視界からはずれた者に対して、ささえの本性は比較的冷淡である。

もちろん、遠く離れた海外での出来事に対して強いささえの本性が発揮されることもある。それは、テレビなどのメディアによって、海外で苦しんでいる人々の実態が、ありありと目の前に映し出されたときである。食料が乏しくなって子どもたちがやせ細り、伝染病にかかって次々と死んでいく光景をテレビで見せつけられたとき、私たちはちょうど目の前で子どもが溺れているのと同じような気持ちになって、ささえの本性が強く発動する。

しかし、この場合、遠くの国での出来事が、テレビというメディアをとおして、あたかも目の前で繰り広げられているかのように見せつけられたがゆえに、私のなかのささえの本性を強く刺激してしまったのだ。もし、これが、「アフリカで多数の餓死者が発生」という新聞の一行の記事にすぎなかったとしたら、私はけっしてそのような強い感情をもつことはなかったであろう。

このことから分かるのは、ささえの本性は、私の目の前にありありと情景があらわれるときにもっとも強く発動するということ。そして、目の前にありありとあらわれなければ、ささえの本性はどうしても鈍感になってしまふということだ。要するに、ささえの本性というのは「近視眼的」な本性なのである。そして、近視眼的であるがゆえの強さと、弱さをもっている。

近視眼的な強さというのは、困っている者や苦しんでいる者が目の前にありありとあらわれたときに、理屈や計算を超えてその者に手をさしのべてしまふという強さである。たとえばその相手が敵であつても、たとえばその相手を助けることが実は自分にとって損になることが分かり切っていたとしても、しかし思わず手をさしのべてしまふという強さをもっている。この強さは、自己利益の本性を、その瞬間に覆してしまふことのできる強さである。このように、ささえの本性には「理屈や計算を超えてその瞬間に他者を助けてしまふ」という強さがある。そのおかげで、私たちは、苦しんでいる他者をとっさに助けたり、救助したり、抱きしめたりすることができなのだ。そのような強さが発揮されたとき、私たちは、他者の生命の質の評価などを度外視して、その人の存在そのものを抱きとるような行動をすることができる。

近視眼的な弱さというのは、たとえば苦しんでいる他者の姿が

目の前にありありとあらわれなければ、それに対しては冷淡になつてしまうという弱さである。アフリカで飢えている子どもたちの姿がありありと報道されず、単にその事実のみが知らされるときに、私たちが示してしまう冷淡さが、そのいい例であろう。

あるいは、遠くで苦しんでいる多数の見知らぬ人々よりも、目の前で苦しんでいるたったひとりの知り合いの姿のほうにこころを動かされてしまう性質を、私たちはもっている。これは「強さ」となつてあらわれることもあるが、逆に「弱さ」となつてあらわれることもある。

たとえば、長期的な援助計画やサポートプランにのつとつて、計算づくのささえの行動をしようとしているときに、目の前にあらわれた一部の苦しんでいる他者のために思わず資源や労力を使いきつてしまつて、その計画が台無しになるといふことがある。

これは、ささえの本性がはらんでいる近視眼的な弱さだと言える。

あるいはこのような例がある。日本で脳死臓器移植に慎重論を唱えている人たちは、けつして心臓病の子どもたちが死んでしまえばいいと考えているのではない。そうではなくて、医療過誤が起きやすい現在の日本の医療現場において移植を再開したとすれば、それは長期的にかなり深刻な医療問題を生み出すことにながつてしまふにちがいないと判断して、慎重論を唱えているので

ある。彼らは、社会全体を見渡した長期的なプランを念頭に置いて、そういう発言をしているのだ。

ところが、そういう人たちに向かって、「じゃあ、あなたは、いまここで死にかけている。この子を見殺しにしろというのか」と迫ってくる医師や家族がいる。私は慎重論の持ち主だから、そういうことを何度か突きつけられてきた。私も人間だから、そういうことを言いたくなる人の気持ちは理解できる。そして、その衝動の奥底に、いまここで苦しんでいるこの子をなんとかしてあげたいというささえの本性があることも理解できる。しかしながら、日本において脳死臓器移植という医療をどのように長期的に根付かせていけばいいのかを考えるとという文脈において、医師や家族がそのような発言をしてしまうところに、ささえの本性の「弱さ」というものが典型的にあらわれていると私は思う。

さらに言えば、ささえの本性は、いま、目の前で苦しんでいる人に対しては「瞬間的に」強く発揮されるのだが、しかしながらそれは必ずしも長続きしない。さっきは手をさしのべてあげたのに、同じような状況が数日・数週間と続いていったときに、だんだんと最初の熱気と感情は醒めていってしまって、逆に負担を感じはじめたりする。「目の前で、この瞬間」というインパクトが薄れてくると、ささえの本性は鈍感になる。「長続きしない」と

いう性質を抱えているから、ささえの本性は「長期的な計画」と折り合いが悪い。

ささえの本性には、いま述べたような「強さ」と「弱さ」がある。それらは、ささえの本性がもっている近視眼的な性質に由来している。私は、近視眼的な性質が悪いと言っているのではない。それは、ささえの本性が抱える宿命のようなものとして認めざるを得ない。そのうえで、そのような性質をもったささえの本性を、社会のなかでどのように活かしていけばいいのかを考えるべきなのだ。

2 ささえの本性の弱さをどう克服するか

このことは、社会福祉を考えるとときに重要となる。

以前にも書いたが、困っている人や、不利な状況にある人を助けようとする援助思想には二種類ある。「利己主義の援助思想」と「利他主義の援助思想」である。利己主義の援助思想とは、情けは人のためならずという思想である。困った他人をみんなが助けるような社会では、自分が窮地に陥ったときに、自分もまた誰

かによつて助けてもらふことができる。だから、そのような社会を作り上げておいたほうが、結局は自分のためになる。そういうふうを考える。

これに対して利他主義の援助思想とは、惻隱の情にもとづいた思想である。子どもが井戸で溺れていたときに、いてもたつてもいらなくなつて、思わず飛び込んでその子を助けてしまふ。そういう人間の本性を基盤に置くような思想である。私たちが、困つている人を目の前にしたときに、思わず手をさしのべたくなるという気持ちを、みんなが自然に行動に移せるような社会をめざすのだ。

この後者の利他主義の援助思想に注目していただきたいのだが、困つている人を目の前にしたときに思わず手をさしのべてしまふということを経験しているわけだから、その基盤にはあきらかに「ささえの本性」が存在している。ということは、利他主義の援助思想というものは、ささえの本性と同じような「弱さ」を抱えているということだ。具体的に言えば、目の前でありありと苦しんでいる人に対しては思わず援助行動に出るが、遠く離れた見知らぬ人々に対しては腰が重いという弱さである。そして、時間が経つてくるとだんだんと気持ちが薄れてくるという弱さである。

たとえば、一九九五年に起きた阪神大震災のときに、一時的なパニックが終わったあと、地震の被害者たちはすばやい援助行動に移った。自分の家が崩れ落ち、家族の安否も分からない状況で、少なからぬ人々が、生き埋めになっている他人の救助に走った。彼らは、目の前で繰り広げられているこの事態をなんとかしなければという興奮状態になって、とにかく救助に駆けつけた。自分の家族が生きているのか死んでいるのか分からない、どこかに埋まっているかもしれないという状況のなかで、それでもなお目の前で生き埋めになっている他人を救出しようと全力で瓦礫を取り除いた。崩れた瓦礫の下で、誰かが助けを求めているという事実を目の前にしたとき、自分の都合とは関係なしに、その人を助けようとする行動に出てしまう。「目の前、この瞬間」というものが、人々をささえに駆り立てる力には、すごいものがある。全国からすばやく集結したボランティアたちもまた、地震の悲惨さを見て、いてもたってもいられなくなって、自分の都合を後回しにして集まってきたのにちがいない。

しかしそれから一年以上経った現在、彼らは、あ那时的ような、苦しんでいる人を助けてあげたいという熱情に、いまだなお満ちているであろうか。

被災者たちは、最初は自分のことを忘れてお互いに助け合った

が、仮設住宅に住み、自分たちの土地や建物が整理されてくるにつれて、少しずつ自己利益にもとづいた自己主張を始めるようになった。昔と同じような暮らしに早く戻りたいという欲望が目覚めてきた。自分の都合を優先して、個人主義的にそれを追求するという行動パターンが戻ってきた。

もちろん、被災者のなかには、いまだ献身的な援助を担っている人々がいることは承知している。しかし、大多数の人間は、徐々に、自己利益を基本において自分たち家族の生活を第一に考えるようなスタイルに戻っていったのではないか。

ボランティアも同じである。九五年冬から春にかけて全国から集結してきた人々は、その後どうなったのか。被災地に住み着いて援助活動に専心したり、たびたび戻ってきた人たちがいたのは事実だが、しかしそれは例外的現象ではなかったか。阪神地区以外から駆けつけた多くのボランティアたちは、当初の興奮が冷め、メディアが報道しなくなり、新鮮味が薄れていくのに比例して、被災地から足が遠ざかっていったのではないのか。

私は、それらのことを批判しているのではない。それは、ささえの本性が宿命的に抱えている弱さなのであり、そこを糾弾してもはじまらない。

むしろ、「目の前、この瞬間」の他者の苦しみに敏感に反応す

る「ささえの本性」が私たちのなかに強烈にあるからこそ、私たちはそこに「助けを必要とする苦しみ」があるということに認識できるのである。そして、理屈と計算を超えて、瞬時にそこに向かつて手をさしのべることができるのである。

しかしながら、ささえの本性にもとづいた援助行動は、熱が冷めたときに、宿命的に後退していつてしまう。だから、私たちが考えなければならぬことは、ささえの本性から発する熱情が薄まっていったときに、別の形の援助行動によってそれを徐々に置き換えていくにはどうすればいいかということである。たとえば、それは、それぞれの被災者の自己主張を調整して、より不利な人々の要求から満たしていくと言ったような冷徹な社会調整の作業であるかもしれない。あるいは、個別の人間の直接の利益にはすぐに反映しないように見える基盤整備を、長いスパンで行なっていくことかもしれない。いずれにせよ、「いま、目の前」の苦しみをなくしたいというささえの本性の視点から見れば、とても「冷たい」ものに見える作業こそが、熱の冷めたあとの援助行動の基本になつていかなければならない。それは、おそらく、利己主義の援助思想にもとづく社会調整作業に似たものとなるはずだ。

このように、ささえの本性にもとづいた「いま、目の前」の援助行動と、その熱が去ったあとの、自己利益の主張を調整するか

たちの援助行動とを、上手に補いあって使っていくような技量を、私たちの社会は学習していくべきである。

3 二種類の援助思想ははっきり区分できない

いま、図式的に、「利己主義の援助思想」と「利他主義の援助思想」の二種類に分けて考えてみた。大枠はそれでいいと思うのだが、他者を助けたいという思想と行動がこの二つだけに還元できるはずはない。

たとえば、阪神大震災のときにボランティアで駆けつけて、その後も避難所などにずっと住み込んだ人たちがいる。ある青年は、いわゆる自分探しのためにここに来てボランティアをやっていると言う。ボランティアをやって、他者のために働くことを通して、「ほんとうの自分」が見つかるような気がすると言う。困っている他人のために働いてみてはじめて、「自分がほんとうに自分である」という充実感や、ある種の癒しの感覚をもつことができたと言う。このような意見は、若い人たちから何度も発せられたように思う。

たしかに、これは、自分探しや自分の癒しのために他人の援助をしているという、典型的な「利己主義の援助思想」だと言うことが出来る。そして、これは、震災の場だけでなく、たとえば末期医療や老人介護の現場で働いているボランティアのあいだにもよく見られる傾向である。つまり、自分の問題を解決する手段として、他人への無償の援助という仕事をしてみるのだ。しかし、このようなボランティアたちが、援助される側の人間と衝突を起こしてしまうこともある。たとえば、ボランティアが自分自身の癒しにこだわるあまり、困っている他者に対して余計な負担を押しついたり、彼らを逆に困らせたりすることがある。援助される側にとってみれば、「この人は結局、自分の得のために援助をやってるんじゃないか」という疑念が強まってしまう。

どうしようもないこころの悩みをかかえた人間が、苦しんでいる人々とかかわることによって自分の悩みに突破口を開こうとする。そのようなパターンは、いまの日本にけっこう見られると思う。それを若者の自分探しの旅として肯定的に見るのか、あるいは自分のために他人の苦しみをダシにするエゴイズムと見るのかは難しいところだ。

ただ、ひとつだけ注目しておきたいのは、彼らが自分を探そうとしたり、自分のこころの問題を解決しようとしたときに、苦し

んでいる「他者」に無償でかわろうとするのはどうしてか、という点である。それを「自己利益の援助思想」だと言い切ってしまう前に、彼らが少なくとも「他者」を求めようとしているというこの一点に食い下がってみるべきだと思う。もちろん、彼らが行き先が、「他者」さえも自己のなかに内部化していこうとする完全自閉である危険性は高いのだが、しかしかならずしもそれだけだとは言い切れない。自己の探究や癒しを求める行為が、他者への無償のかかわりを要求するというこの意味を、権力性や支配構造を念頭に置きながら、さらに深く考えてみなければならぬ。これについては、他の機会に再論したい。

ささえの本性にもとづく援助は、「目の前、この瞬間」の他者の苦しみにもっとも強く反応する。それはそうなのだが、しかし、ささえの本性にもとづきながらも、もっと長期的で地道な援助活動を行なっている人たちがいる。非政府組織に所属したり、あるいは単独のボランティアの身分で、高齢者や障害者や海外の難民たちに長期的な援助を行なっている人たちである。彼らは、目の前で苦しんでいるから瞬間的に彼らを助け、その興奮が去ったらもう援助する気がなくなるというやり方はしていない。「目の前、この瞬間」にはたらくささえの本性というものを大切にしながらも、それを長期的で地道な活動へと結びつけようとしている。

それはおそらく、ささえの本性というものを、もつと合理的で理論的な計算によってコントロールしようという戦略をとっているからであろう。瞬間的なささえの本性だけにもとづいていたのでは長期的な援助ができないということを知り抜いたうえで、しかしながらささえの本性のもつパワーそれ自体は最大限に活用し、それを長期的な援助活動のエネルギー源にしようとする醒めた計算があるのだろう。

そして、おそらく、ささえの本性にもとづきながらも長期的な視野でそれを制御していくことに成功すれば、それは利己主義的な動機にもとづいた「利己主義の援助思想」とも結果的には手を結べるかもしれないという計算があるのかもしれない。ささえの本性を、瞬間的に燃え尽きさせるのではないようなやり方で飼い慣らすことにもし成功すれば、それは、長期的な自分自身の利益のために援助活動をするという利己主義の援助思想とも、政治的に手を結べる可能性がある。このような可能性については、さらに深く考えてみなければならぬ。

これに関連して二点補足しておく。まず、「理念」による援助をどう考えるのかという問題がある。たとえば、キリスト教やある種の仏教などは、他者に対する奉仕や慈愛という理念にもとづいて援助活動の地道な実践を行なっている。それは、宗教的な理

念にもとづいているから、視野も長期的であり、一時的な感情の高まりだけにもとづいているわけではない。かと言って、それらの理念は、自分の救済という利己主義だけから来ているとも解釈しにくいところがある。それらの宗教的な援助活動が、ほんとうにその宗教の布教活動と無関係に行なわれているのか、あるいは信者たちの相互扶助という枠をどのくらい超え出ているのかなどの問題があるので、くわしい調査が必要である。しかし、援助活動というものが、ひとつの理念にまで高まったとき、それを人間の生命の本性との関係でどのようにとらえればいいのかという問題が生じるのである。

第二には、金子郁容が『ボランティア』(岩波新書)で説得的に語ったようなこと、すなわち、ささえの行動をする者がみずからを無防備なスタンス（ヴァルネラブルな位置）に置くとき、ささえをする側もまた他者によってささえられてしまうということが起きる。つまり、援助行動というのは必ずしも一方向的なものなのではなく、ささえられるはずの人間から逆に力を得たり、傍観者であつたはずの人たちから助けられたりという、カづけのさざ波の連鎖を生んでいくことがあるのだ。他者をささええるプロセスに見られる、このような逆説を見逃してはならない。

このように、援助思想は、利己主義の援助思想と、利他主義の

援助思想にはつきりと区分できるわけではなく、そのふたつを両極の理念型としながらも、そのあいだに多様なグラデーションをもっているのであり、かつ「計画性」や「理念」や「ささえの相互性」などの要素もまた複雑に混入しているのである。

このあたりのことを、さらに別の角度から見よう。

ささえの本性が強く刺激されるのは、いま、目の前で苦しんでいる人がいたときである。そういう人を前にしたとき、人は、いてもたってもいられなくなって、思わず手をさしのべてしまう。

このとき、その人は、目の前で苦しんでいる人が発する「訴えかけの場」というものに、思わず引き込まれて、手をさしのべてしまうのである。はげしく渦を巻いている川の流れを横切るときに、我々はどうしてもその渦に身体を引き込まれてしまう。ちょうどそれと同じように、我々は苦しみを訴える人がそのまわりに作り出す「助けてほしい」という訴えかけの渦のなかに、否応なく巻き込まれてしまうのだ。そうやって、巻き込まれ、引き込まれてしまうから、我々は思わずその人に対して手をさしのべるという動作に出る。

私がそういう動作に出るとき、私は、ほんとうに、なにか自分を押し流していくような力強い流れに負けるようにして、手を差し伸べる。自分を守ろうとする保身の動作を押し流すようにして、

大きな力が外側から私を襲い、それが私のなかにある利他の小さなところを突き動かして、私にそのような行動を取らせるのである。私は『「ささえあい」の人間学』(法蔵館)という本のなかで、他者から発せられる「ささえてほしいという訴えかけ」に突き動かされて、その他者になにかを与えることを「ささえ」だと考えた。そのような「ささえ」の行動を私がしてしまう背景には、たしかに「ささえの本性」がある。

ところで、ささえの行動を私がしてしまう原因は、このような「引き込まれ」だけではない。それに加えて、たとえば「苦しんでいる人の役に立ちたい」というような感情から、私が他者へささえの手をさしのべることがある。この「役に立ちたい」という動機は、「引き込まれ」てする援助よりも、もつと積極的に主体的であると言えるかもしれない。困っていたり、苦しんでいたりする人の役に立ちたいという感情は、多かれ少なかれ、多くの人に共通して存在する。いつもそういう気持ちを自覚している人は少ないだろうが、自分がしたことがなにか他人の役に立ったと思えたときに、うれしくなったり、気持ちが高揚したり、満足感に襲われたりすることは誰でも経験したことがあるはずだ。以前にも述べたように、援助を職業としているような人々、たとえば看護婦とか、図書館の司書などは、患者やクライアントの役に立て

たということ喜びとし、こころのささえとして働いていることが少なからずある。

この「役に立ちたい」という思いは、ときによって、自分のアイデンティティや、自己評価とのかかわりで現われてくることもある。たとえば、自分が何者であるのかわからないとか、自分がなんのために生きているのかわからないとか、自分は存在に値する人間なのだろうかなどの悩みを抱いている人が、苦しんでいる他人に手をさしのべることでその人の役に立てた場合、「ああ、自分でも他人の役に立つことができるのだ」と実感して自己肯定できたり、「他人の役に立てる自分」というアイデンティティを獲得したりすることがある。つまり、他人の役に立つということを通して、自己像を建て直すことができるわけである。

先に述べたような、自分の癒しのために他人を援助する人々は、まさにこのような動機にはまっている。彼らは、言わば、「他人の役に立つ」ような自分を発見するために援助活動をするのである。その意味で自分探しのために他人の援助をするのである。そして、このことが、援助の現場において問題を生じさせることがある。自分探しのための援助というものを、だからと言って否定すべきなのかどうか、私にはまだわからない。そのような動機にもとづく援助を、具体的なトラブルに導かないようにするための、

何かの仕組みを見出すことはできないだろうか。

ささえの行動をするもうひとつの動機としては、苦しんでいる人を見たときに、「自分も過去に助けられてありがたかったから、今度は自分が助ける側に回りたい」というものがある。たとえば、阪神大震災が起きてテレビで報道されたとき、過去の災害のときに援助を受けた地方の人々が、即座にボランティアとなって駆けつけたというケースがあった。自分がかつて誰かから助けられたという思いが、今度は、困っている別の誰かを助けあげたいという思いとなって連鎖していく。これは、過去に助けてくれたその当人への恩返しということではない。そうではなくて、誰かから発したささえの思いが、この私を貫いて、今度はまったく別の苦しんでいる人へと伝わっていくということ。このような「困っている人を助けてあげたい」という思いの連鎖を、他人への強制に陥ることなく、かつ息苦しくならないような形で、社会のなかでつないでいくことはできないのだろうか。

しかしながら、ささえの行動を活性化させようとするこのような試みは、かならず巨大な壁にぶちあたってしまう。ひとつは、人間の生命の本性のひとつである自己利益の本性との衝突なのであるが、もうひとつは、ささえの本性それ自体が自己組織的に創出してしまう「権力性」と「パターナリズム」の壁なのである。

それらの難問については、次回にくわしく見ていくことにしたい。

第七章

今回も、ひき続き、ささえの本性について検討する。繰り返すことになるが、もう一度、ささえの本性とは何であつたかを確認しておきたい。

ささえの本性とは、困っている者、助けをもとめている者、苦しみを訴えている者、不安におびえる者などを見たときに、彼らを助けてあげたい、ささえてあげたい、世話してあげたい、守つてあげたい、願いをかなえてあげたいと思い、行動してしまう本性のことである。

それは、「利他的行動」「援助行動」「自己犠牲」などの姿をとってあらわれてくる。

困っていたり、助けを求めたりしている他人を、ささえてあげたいと願う「ささえの本性」は、一見すれば何の問題もはらまない、美しい本性だと思われるかもしれない。しかしながら、くわしくその本性のはたらきかたを見ると、必ずしもそうは言えないことが分かってくる。

前回検討したように、他人を助けてあげたいという行動が、実は自分自身のこころの癒しを第一目的としたものであるケースも少なくない。そういう場合、その人は、他者のためというよりも、むしろ自分自身の救いのために行動しているわけだ。そのような援助者に助けてもらった人は、割り切れない気持ちや、ある種の偽善を感じてしまうかもしれない。「あなたのことが心配で」と言われても、「ほんとうは自分のことしか考えてないんじゃないの？」という疑問がぬぐい去れなかつたりする。

今回と次回は、まず、ささえの事実が「権力支配関係」を生み出してしまうケースを考え、そのあとで、ささえの行動がどうして「パターンナリズム」を生み出してしまうのかを考えてみたい。これらは、一筋縄ではいかない難問である。

まず権力支配関係について考えてみたい。

困っている人を助けてあげたいという思いが、どうして権力や支配と結びつくのか。権力によって虐げられ、強者によって支配されている人々を助けてあげようとすのが、ささえの本性なのではないか。助けてあげたいという思いが、権力支配関係を生み出すことはほんとうにあるのか。

これについて考える前に、まず、我々の社会のなかの「ささえあい」の姿をもう一度見ておく必要がある。

前にも述べたように、ささえの本性とは、人類が何百万年もあいだ集団生活をしてお互いに助け合いながら生き延びてきたという「ささえの事実」から生み出され、人間の奥底に刻み込まれた。

では、なぜ人類は、集団生活をしてお互いに助け合うという生存形態をとったのであろうか。その答えは、おそらく、そういう共同生活をしなければ、過酷な自然環境のなかでしぶとく生き続けてゆくことができなかったからだ。みんなでまとまってお互いの面倒を見合うことで、やっと生存を続けることができたのにちがいない。

一九世紀末の社会主義者・アナーキストのクロポトキンも、そのように考えた。そして、人類はそれらの助け合いの精神を、動物たちから受け継いだと彼は考える。その論旨を見てみよう。

クロポトキンは、『相互扶助論』(同時代社)のなかで、動物たちのささえあいの姿を生き生きと描いている。オオカミや鳥のような

陸上動物から、カニのような甲殻類まで、あらゆる動物は、自分たちの種が生き延びていくために細やかな助け合いの行動をする。動物たちが助け合いをするのは、きびしい自然の猛威に打ち勝ち、ほかの種との生存競争に打ち勝つことで、自分たちの種を生き延びさせるためである。日頃は小さな群れで生活している鹿たちも、気候の変動のために大移動しなければならなくなると、その地域一帯から何万匹もの仲間が集まって、全員でお互いを防御しながら大河を渡ってゆくという。クロポトキンは、その様子に感銘を受け、相互扶助論を着想した。

自然の猛威に耐え、ほかの種との競争に負けないためには、仲間同士でまとまって集団行動をとったほうが有利になることがある。とくに、自然条件が過酷な場所では、動物が一匹ずつ単独行動するよりも、みんなが集まって仲間を守りつつ行動したほうが、全体が生き延びる可能性が高くなる。たとえば、きびしい寒さが襲ってきて、餌が乏しくなったとき、それぞれが単独で放浪して消耗するよりも、仲間が集まって穴の中で身体を寄せあい、獲物を探す外敵から集団で身を守ったほうがずっと効果的であろう。逆に言えば、危機的状況に直面したときに、仲間が集まって集団行動をとることのできた動物種のみが、きびしい環境に打ち勝つて、今日まで生き延びてこられたと言えるかもしれない。

クロポトキンは、相互扶助こそ、動物のもっとも基本的な本性なのだと言う。それにくれば、競争というものは例外的な事象なのだ。彼によれば、動物にとっていちばんきびしい敵というのは、食料を奪い合う他の動物ではなく、過酷な自然条件のほうである。「一年中のいかなる時期においても、彼等は食物のために相争うことはできない。彼等が繁殖過多ということに少しでも近い数に達し得ないのは、気候のためであって、競争のためではない」(九〇頁)。だから、動物たちがいつも競争し、相争っているというイメージは、ダーウィンが植え付けた誤った観念であるとクロポトキンは言う。

「競争してはいけない。競争は常に種に有害なものである。そしてそれを避ける方法は幾らでもあるのだ」。これが自然界の傾向である。…「故に団結せよ。相互扶助を實行せよ。それは、最大の安寧と肉体的知識的および道徳的の生命と進歩との最善の保障を、各人および総人に与えるもっとも確實なる方法である。」(九五頁)

動物の世界に普遍的に見られるこの相互扶助の本性を、人類はその進化の過程で引き継いだのだと、クロポトキンは考える。彼

によれば、人類の歴史が互いの闘争と戦争に明け暮れてきたというのは、誤った人間観である。人類の歴史のどの瞬間をとっても、お互いのための相互扶助の行動がとだえたことはなかった。それどころが、様々な危機に見舞われたときには、個人行動よりも、相互扶助の行動のほうが力を持ったのだ。

たとえば、ヨーロッパの荒れ果てた原野のなかで生き延びていくのは、弱い孤立した家族では不可能である。その過酷な環境を征服するためには、村落共同体を形成して、みんなと一緒に労働して生活の場を切り開かなければならない。

このような相互扶助のうえに、その後の人類の文明が開花してゆく。だから、人間にとってもっとも基盤的なものは、競争ではなく、相互扶助である、とクロポトキンは言おうとしている。

3 役割分担と組織化

クロポトキンの熱意は十分に伝わってくるし、彼の相互扶助の考え方は、今日いつそう注目すべき思想だと私は思う。しかしながら、彼は、人間のあいだの相互扶助を強調するあまり、その相

互扶助という行動それ自体が、人間社会のなかに支配と抑圧を生み出してきたことをきちんと見ようとしていない。

もちろん、マルクス・エンゲルスをもちだすまでもなく、原始社会の成立とその変容のどこかの地点で、いわゆる私有財産制の考え方が登場し、それによってクロポトキンが夢想したところの相互扶助の美しい関係性に決定的なひびが入ったことは疑いがない。しかし、実は、それ以前の段階ですでに、人間社会の相互扶助は、クロポトキンが実際に観察した動物たちの相互扶助とは異なった位相に入ってしまったはずだと私は考えている。

つまり、きびしい気候条件や外敵から集団で身を守ろうとするとき、人間たちは、ただ単にみんなと一緒に寄り集まって、身を寄せあっていたわけではない。そうではなくて、人間たちは、集団で身を守るときに、それぞれが何かの役割分担をして、異なった役割を果たしながら全体を守るという、いわば「組織」形態を形成していたにちがいない。たとえば、外敵から身を守るときには、敵の侵入をいち早く察知する「見張り」役と、外敵を腕力で退散させる「兵士」役などが組織化されていたはずだ。もちろん、そのような役割分担と組織化は、動物の世界でも普通に見られる。人間はそれを受け継いで、さらに高度に発展させたにすぎないとも言える。

しかし、いったん役割分担と組織化が達成されて、それが成功すると、今度は役割のあいだに、必然的にヒエラルキーが生じてきてしまう。たとえば、「見張り」という役割が、全体の防衛のためにもっとも重要だったとしよう。すると、見張りをいちばん上手にできる人物が、他にかけがえのない、もっとも重要な存在として認知される。そして、その人物は、見張りという役割から得ることのできる「情報の管理」を一手に引き受けるようになる。そして、情報の管理によって、その集団の意思決定のトップに立つことができるようになるかもしれない。

たとえば、すぐれた見張りのいる集団と、見張りのいない集団が、寒い冬の季節に食料を求めて競争したらどうなるだろう。見張りというのは、ただ単に高いところから全体を見ているだけではない。食料を求めてあちこちに散らばっては戻ってくる仲間たちから食料情報を収集し、どこかに良い場所があるということが分かれば、みんなにその情報を流してそこへみんなを向かわせる。そういう情報管理をきっちりとするわけだ。

そういう見張りのいる集団と、いない集団では、歴然とした差ができてしまうにちがいない。つまり、役割分担と組織化がうまく行なわれた集団のほうが、きびしい環境条件のもとでは、生き延びやすいと言える。

ここは大事なところだから、立ち止まって考えてみよう。

そもそも、ささえの本性とは、ささえの事実から生み出されたものだとは考えた。ささえの事実とは、人類が集団生活をしてお互いに助け合いながらいままで何百万年も生き延びてきたという事実のことであつた。そこから、困っている人を助けてあげたいと思うささえの本性が発生し、人間の奥底に刻み込まれた。

しかしながら、ささえの本性を生みだしたところの、「ささえの事実」というものは、けつして各人がめいめい勝手に自分の自由意思で他人を助けたり、集団のためになることをしていたというのではない。そうではなくて、他人の援助や集団の防衛は、なにかの役割分担と組織化のもとで、ある程度システムティックに行なわれていたはずなのだ。そして、そういうシステムティックな動きが可能であるということは、そこに「命令するもの」

「命令されるもの」とか、「判断するもの」「手足となるもの」などの上下関係が成立していたと考えるのが自然ではないだろうか。そういう上下関係がはっきりしていたほうが、食料を恒常的に得るために集団で狩猟をしたり、集団を防衛するために河川工事をしたり、外敵から身を守るために兵を動かしたりするときに、効率的だったのではないだろうか。

そして、そういう効率的なヒエラルキーを内蔵した社会が、い

るんな悪条件に打ち勝って古代文明を形成し、農耕を開始し、現在の産業文明にいたる道を切り開いたのではないだろうか。(アフリカなどの伝統社会ではそのようなヒエラルキーがさほど濃厚ではない例もあるが、しかしそこにも、権力支配関係は存在する。)

さて、役割分担と組織化が行なわれ、上下関係が成立したとする。すると、そこには、はっきりと「権力」と「支配」が発生する。「命令するもの」「判断するもの」のほうにシステムの力が蓄えられるようになる。私はおまえを意のままにできるが、おまえは私を意のままにはできない、という意味での支配がたちあらわれてくる。これは、集団の様々な部門であらわれる。家族のなかでも、あるいは同じ役割を果たす部分集団のなかでも、あるいは集団全体のなかでも、このような支配関係が成立する。

つまり、「ささえの事実」というのは、人間たちが、役割分担と組織化を通じて、権力支配関係込みの助け合いをしてきたという事実なのだ。厳しい環境に打ち勝つために、そのようなヒエラルキーを組み込むことで集団を維持してきた、そのことが「ささえの事実」なのだ。

だから、困っているものを助けてあげたいと思ってしまう「ささえの本性」のルーツにあるものは、助け合いを効果的に機能さ

せるために、人々のあいだに役割分担と組織化を通した上下のヒエラルキーを組み込み、その結果、そこに権力支配関係を生み出してきた「ささえの事実」なのだという点を、もつとしっかりと見据える必要がある。

4 「ささえの本性」が負わされるもの

つまり、人間社会における助け合いは、そのほとんど最初の時点から、権力支配関係込みのささえあいであったということだ。これは、次の三つのことを意味する。

まず、そのような権力支配関係込みのささえあいを成立させた根本原因は、きびしい自然環境や外敵から、自分たちの集団の全体あるいは主要部分を守って、生き延びさせなければならぬという意志がその集団に働いたことにある。さらに言えば、そのときに、集団の全体とか主要部分をどうやって将来にわたって維持していくかということが考慮の対象となったからこそ、権力支配関係が案出されて、そこに組み込まれたのだ。「全体」とか「主要部分」というものへのまなざしがなかったならば、個

々の人間同士のその都度の瞬間的な助け合い、といったもの以上のものは出てこなかったはずだ。助け合いが始まったとき、そこにこのようなまなざしが存在していたであろうことは、注意しておく必要がある。

第二に、ささえあいが、「全体」や「主要部分」の生き残りということ念頭において行なわれ、ささえあいの行為が 権力支配関係込みのささえあい であつたとすれば、そこには当然、ささえあいの対象から切り捨てられ、排除される人間たちが出てくる。すなわち、きびしい条件のもとでは、集団の主要部分のあるレベルでの生き残りにとってじゃまになる存在は、切り捨てられるざるをえない。動けなくなった老人や、生産活動のできなくなつた障害者たちが、共同体から見捨てられた例はたくさん報告されている。現在でも、施設への収容という形でそれは行なわれている。これは、きびしい環境と限られた資源のもとでの集団の主要部分の生き残りということを考慮した瞬間に、必然的に導かれてくる選択肢なのである。もちろんこの選択肢しかないわけではないのだが、しかし「主要部分」ではない人間の切り捨てという道を選択しなかつた社会というのは、それほど多くない。

さきほど、「全体」あるいは「主要部分」というものへのまなざし、と私は書いた。「全体」へのまなざしというのは、往々に

して「主要部分」へのまなざしの言い換えにしかすぎないということに注意を喚起したかったからである。つまり、ほんとうに「全体」へのまなざしがあるのなら、弱者の切り捨てということが簡単に選択されるはずはないからだ。弱者もまた「全体」のかけがえのない構成要因なのだから、弱者への配慮は絶対条件になるはずだ。しかしながら、「全体」をどうすればいいかという配慮は、往々にして、「主要部分」をどうすればいいかという配慮へと変質しがちである。なぜ「全体」が「主要部分」へとすりかわるのか。その秘密を解明しなければならぬ。

もうひとつ注意しておきたいのは、このような弱者の切り捨てが、「助け合い」「ささえあい」という名のもとに行なわれることがある、ということだ。船が沈もうとしているときに、船の中心部にいる人々は、お互いにエゴを出さずに抱き合って助け合い、船の縁で落ちそうになって這いあがれない人々に対しては、苦しまずに死ぬのが君たちのためになると言っただけを海に突き落とす、というようなことを人間はたびたび行ってきた。このときに、船の中心部でエゴを出さずに助け合うことも「ささえあい」と呼ばれ、船から突き落として安楽死させることもまた、彼らのために思った「ささえあい」とみなされることがあるのだ。『櫓山節考』の世界、あるいは、障害者は苦しみなく死ぬのが彼らの

ためだとして障害者たちを安楽死させたナチスドイツの医師たちの行為は、このようなものであった。「ささえあう」ために、そして「ささえあい」の名のもとに、人は人を殺したり見捨てたりすることができると言っている。

第三に、人間社会のなかに普遍的に見られる、このような「集団の主要部分の生き残り」をめざした助け合いのシステムというもの、我々が抱えている「ささえの本性」は、しばしば衝突するのだ。「ささえの本性」というのは、私の目の前で、誰かが困っていたり、苦しんでいたときに、その人を助けてあげたかと思ふ本性のことだ。だから、集団の主要部分が生き残るために、弱者が切り捨てられて苦しんでいるのを、私が目の前で見ると、私が見ると、私のなかの「ささえの本性」はそれが許せなくなる。彼らに思わず手をさしのべて、彼らをこんなふうにした「助け合いのシステム」というものに怒りをぶつけれなくなってしまふ。「ささえの本性」は、主要部分のために切り捨てられた人々の苦しみを黙って見過ごすことのできる本性ではない。「ささえの本性」は、主要部分の生き残りへのまなざしよりも、目の前の人々の苦しみのほうを、ずっと大事なものとして考える。その本性は、我々のなかの深いところに刻み込まれている。

この第三の点は、とても逆説的な現象である。

というのも、「ささえの本性」というのは、「ささえの事実」から生み出されたものだからだ。人間が集団生活をして 権力支配関係込みのささえあい を行なってきた、その歴史の積み重ねによつて人間のなかに刻み込まれたものが、「ささえの本性」だからだ。この点を、どのように考えていけばいいのか、いまの私にはまだよく分からない。

このポイントは、「ささえの本性」と「自己利益の本性」の対立に関係があるのかもしれない。以前にも述べたように、困っている他人を助けてあげたいという援助思想には、利己主義の援助思想と、利他主義の援助思想の二種類がある。前者は、それが結局のところ自分のためになるからという「自己利益の本性」に基づいており、後者は困っている他人自身をなんとかしてあげたいという「ささえの本性」に基づいている。

このように二種類に分けたときに、集団の主要部分の生き残りを優先して考える助け合いのシステムとは、その集団の主要部分に属している権力者から見たときの「利己主義の援助思想」を具現化したものではないのだろうか。だから、そこに潜んでいる「自己利益」というものに、「ささえの本性」は反発を感じるのかもしれない。あるいは「全体」や「主要部分」について配慮して何かの計算するということ自体に、「ささえの本性」は反発するの

かもしれない。これは、前回に述べた、「ささえの本性」の近視眼的な性質と関係している。

この問題、つまり、困っている人をささえるというときに、目の前のひとりの人だけをささえればいいのか、それともある一群の人たちだけをささえればいいのか、あるいは困っている人々全体をささえなければならぬのかという問題は、ささえあいというものにいつもつきまとう難問である。これに加えて、ある一群の人々をささえるためには、他の人々を見捨てたり切り捨てたりしていいのか、という難問が生じてくる。

私の考えでは、「ささえの本性」は、まず目の前のひとりの人間だけをささえるというときにもっとも強く活性化される。「ささえの本性」は、その意味では、やはり近視眼的である。だから、「ささえの本性」の視点から答えを出せば、まずそれぞれの人が、自分たちの目の前の困っている人々をささえればよい、ということになるはずだ。全体をどうするかとか、ある集団をどうするかということは考えずに、まず目の前のやるべきことをいまずぐやろう、ということになる。

しかし、全体のことや、主要部分のことを配慮して、権力支配関係込みのささえあいのシステムを組み上げている社会があったときに、「ささえの本性」はそのシステムについて批判的な

スタンスをとることはできない。「ささえの本性」がなすことと言えば、そのシステムによって排除された人間が目の前に現われたときに、その人間の苦しみの訴えかけに対して「ささえの手をさしのべてあげること」しかない。要するに、システム全体から見れば、権力支配関係込みのささえあい のシステムがある合理性によって切り捨てた人々の苦しみを、その都度その都度、個別的かつ自発的にサポートしていく役割を、「ささえの本性」は一方的に担わされてしまうことになる。システムが切り捨てた弱者の苦しみを、単に尻拭いする役割というわけだ。

それも、彼らを切り捨てたところの ささえあいのシステムに対する、怒りをこめた尻拭い。しかしながら、そのような怒りを集結させて、システムに対抗させようとする動きが出てきたとしても、それを組織化して対抗集団に作り上げたたん、それはまた対抗集団の動き方それ自体を合理的に統括するもうひとつのシステムとなってしまう、結局は「ささえの本性」からは離れていってしまうのだ。

では、そもそも人間社会は、どうして「全体」のことや「主要部分」のことを配慮しようとするのだろうか。

まず、そこには、自分のことを全体へとアイデンティファイしてしまう「自己利益の本性」がある。ここにいる自分の利益と同じような意味で、自分の属する集団全体の利益を考えてしまう本性だ。ここにいる自分の存在の意味というものを、自分が属する集団の生き残りと永続のなかで確認しようとする考え方だ。

しかし、それだけではない。

ダーウィンの進化論、そしてその後の社会生物学が想定したような、生存をどこまでも続けたいという生物種の本能のようなものがあるかもしれない。社会生物学は、それを「遺伝子」に過度に還元しすぎるのでつまらないのだが、しかし生存を続けたいという欲望が、生物種単位で強く存在しても不思議ではない。生物種というのは、とりあえずは、生殖によって子孫を生み出し続けてゆける生物個体のまとまりのようなもののだが、それが生き残りの単位として、独立変数のような振舞いをする可能性はある。

そのような、「生殖によって交わってゆける可能性をもった自分たちの集団が、いつまでも生存を続けてほしい」という願いを、

生物個体に抱かせるような、そういう力が存在していると考えてもよいのだろうか。

しかし、もし、そのような力があつたとしても、それは単に自分たちが属する生物種の生存だけにとどまるわけではなく、生物種全体を含み込んだ地球生命圏それ自体の生存というレベルにまで連続しているはずである。なぜなら、現存する生物種は、すべて生物三六億年の進化の途中で、より祖先形の生物種から進化してきたものであり、その意味では、自分たちの生物種が永遠に生存したいという生物種単位の生き残りの欲望を、進化によって裏切ってきた存在だからである。だから、もし生存をどこまでも続けたいという生物種の本能があつたとしたら、その本能は、みずからが進化によつて他の生物種に変容し、あるいは無数の生物種へと分岐してゆく、その無限の多様性の総体が生き残つてほしいとする本能でなければならぬからである。

だから、全体のことを配慮したいという思いが、生物的なものから導かれていると仮定しても、それは単にひとつの生物種の生き残りだけに限定されているわけではないはずだ。ましてや、全体への配慮が、亜種でしかない「人種」や「民族」という次元に固着してしまつたいわゆる全体主義・民族主義などは、きわめて中途半端なイデオロギーにすぎない。しかしながら、現実には、

今世紀の全体主義ほど、生物学的・進化論的な要因を強調した思想はないのだ。

このテーマは、よほど慎重に考えてゆかないといけない。論点がかなり先走ってしまった。

人間社会のささえあいのシステムが、権力支配関係を組み込まざるを得なかったこと、そして「ささえの本性」はそういう「ささえの事実」から生み出されたにもかかわらず、その事実に対して衝突することがあることなどを見てきた。「ささえあい」のなかから、権力支配関係が自己創出してくるメカニズムの解明は、これからの作業である。なぜ、近視眼的な「ささえの本性」がそこから生まれるのかについてもまだ分かっていない。

ところで、権力支配関係込みでのささえあいと衝突してしまふところの「ささえの本性」それ自体も、実は、独特の権力と支配の構造を人間関係のなかで生み出してしまうことがある。その典型的な形が「パターナリズム」である。次回の連載では、この「パターナリズム」の問題をくわしく検討して、ささえの本性の検討をひとまず終えたい。